

# 医家随想



自然の中に生きている

女性

穂 苅 正 臣

八年ほど前にカナダ横断旅行をしたときのことである。案内人の若い女性ガイドさんが「自然を大切にしなければならぬ」と、われわれ夫婦に語りかけてきた。

「人間は自然界の営みをあまり乱してはいけない。自然界には自然界の営みがあるので、人間がそれを乱すよつなことをしてはいけないのです」

と諭すよつに言つのだつた。

森の中で突然起きる「山火事」も時には必要であり、多くの樹木をなぎ倒して

しまつよつな「雪崩」さえも時には必要なのだ。と彼女は、やさしい口調で言つたのである。

純白の冠雪を頂くカナディアンロッキーの山々に囲まれた道路を自動車は走っていた。すると彼女は日本の「開いた松かさ」とは違つ、硬そつで小さな「松ほつくい」をポケットから取り出してさらさらにつけた。

「この松ほつくいの美にはたくさん松脂が詰まつていて、普通地下二、三十センチのところ埋まつています。この硬い松脂は四十五度以上の温度にならないとゆるまないんですよ。」

「山火事」で地面が焼けると、それが解け、焼野原になつたがために太陽光が

いっぱい降り注ぐのでよつやく芽を出すんです。それが大きく育つて樹木となり、やがて松の木の森林をなしていく。種の保存には山火事が必要なんですわ」

松の木の樹齢は百五十年から百七十年だぞうだ。したがつて、遅くても百十年くらいの間隔で山火事がないと、森の形態が変わつてしまい、モミの木の森林に変わつてしまつ、といつ話だつた。

また、樹木が大きく育ち過ぎると、地面に近いところの小さな木には太陽が届かなくなり生育を害する。したがつて、時には「雪崩」が発生して古い大きな樹木を押し倒し、地表の小さな木にも陽が当たるよつになるのが望ましいのだと。すなわち、自然のいとなみである山火事や雪崩もいけば森の摂理であり、人間は人間の都合で森をいじるよつなことは決してしてはならない、といつのが彼女の総括だつた。

約八年前にカナダのモントリオールで

開催された国際航空宇宙学会に出席した  
われわれ夫婦は、帰路、カナダを横断旅  
行しようと、飛行機でカルガリに飛び、  
そこから自動車でカナディアンロック  
の入り口、バンフまで行って宿泊した。  
百四十キロメートルの道程だった。

この後、エドモントン空港までのロッ  
キー山脈沿いの八百キロの区間をガイド  
付きで二泊三日の観光ドライブすることに  
なった。言わば東京から札幌までの距  
離である。ものぐさな私がこんなに煩多  
な旅の計画(?)をするはずもなく、す  
べて家内が計画したのである。

その昔、この旅行と同じルートをバス  
で観光旅行したことがあった。今から約  
四十年前、大学の医局に在籍していたこ  
ろである。やはりモントリオールで学会  
があり、その帰路、このときと同じよう  
にカナダ横断の旅をしたのであった。時  
は九月中旬で秋の真つ最中。雄大なカナ  
ダの山々の美しさを堪能したのであった。

今でも記憶に残るのは、カルガリのよう  
な地方都市の空港でも規模が非常に大き  
いということであった。

今回は道路の雪も解けて、どうにか自  
動車が通れるようになった五月初旬であ  
る。真つ青な春の空に純白の雪山が輝い  
ていた。カナダの山々の景観は、スイス  
とは違い、すぐ近くからはるか彼方まで  
雄大な景色が切れ目なく続くのである。

以前にこの地に来たとき幻想的な美し  
さを覚えたレイク・ルイズは、湖面が  
また雪に覆われていた。雪を溶かすため  
に撒かれた塩に惹かれて山羊が道路上に  
顔を出すので、ガイドは運転に細心を払  
っていた。

三回来ないとこの地の本当の良さはわ  
からないと、ガイドが言った。雪の残る  
季節、雪の解けた季節、紅葉の季節であ  
る。

驚かされたのは、前回来たときアイス  
フィールドセンターの店の前まで雪壁で覆  
われていたのに、「地球温暖化」によって

か三キロメートル以上にわたって雪が解  
け、黒い土が現れていたことであった。

あるお土産屋さん、付近の昔の風景  
や雪壁の様子の写真が飾られていた。そ  
れを見ると一目瞭然、雪氷が次第に解け  
てゆく経過がうかがえた。

今でこそ新聞やテレビで「地球温暖化」  
とか「環境破壊」について、いろんな報  
道がなされているが、そのころはまだそ  
んな話題に乏しかった時代である。

時間の経過によって世の中が変わった  
ということにも、季節の違いということ  
にもよるが、同じ区間を通ってみて、自  
分自身の感じ方が違つのに驚いた。それ  
は決して自分が年齢をとつただけに  
よるものではないようだった。

すなわち、この旅は、人間と自然環境  
とのかわりを私に考えさせてくれるも  
のでもあったのだった。

ジアスパーのホテルに泊まる。日没は  
遅く、九時過ぎである。バンフから三〇

○キロ。メチチ湖 マリン湖を過ぎる。  
マリン湖のレストランの売店で家内がマリリン・モンローのポートルートを買った。モンローがこの地に映画撮影で訪れたときに有名な写真家が写したもので、そので、五十ドルであった。

人家はほとんどなく、人や車に滅多にも会わない。左右の景色は変化もない雑木が茂っている。信号機もなくどこまでも真っ直ぐなカナダの道を、若いガイドさんは案内してくれた。

イエローハイウエー（黄色街道）と呼ばれる道がうねったように上下している。「エドモントン空港まであと百キロ」の看板が出ると、草の緑が濃くなり、牧場が多くなり、アルバータ牛の姿が見えはじめた。町が近づき電柱が、そして電線が目につくようになる。石油採掘の機械が動いている。

ガイドの彼女は千葉県生まれで、スキーが大好きだと言つた。それゆえ雪の多い

カナダに魅せられ留学し、アルバートで観光案内の仕事をしているのだ、と話した。さらにカナダに住んで結婚したいとも言っていた。

いつから彼女があのように自然を愛し、自然の営みを考えるようになったのか、聞けなかったことが残念に思われてならない。

## 美人の話

池田 壽雄

『世界の三大美人を知っていますか？』

と、エジプト旅行の現地案内人のアハメドさんが、我々観光客に質問した。

『残念ながら、全部エジプト人ですけど』

さあ、クレオパトラはその一人に違いないが、あとの二人は誰なのだろうと思案していると、

『ラムセス2世（第19王朝の大王）の第一王妃であったネフェルタリと、アメ

ンホテプ4世の王妃のネフェルティティと、さらに、クレオパトラ7世（プトレマイオス朝の女王）の3人が正解です』と説明した。でも、日本人にとっては、大いに不服である。日本人なら、まず、小野小町（オノノ）、コマチ』を挙げるに違いない。さらに、『アラ士稷稀』の我々なら、山本富士子、吉永小百合を加えて、『三天美人』と答えるだろう。けれど、『世界の』という形容詞がつくと、やっぱり駄目か、とため息をつくところである。勿論、中国人なら、『楊貴妃』をと主張するに違いない。

ところで、現在開催中のカナダのバンクーバーの冬季オリンピックで美人の噂が高いのが、カーリングの『目黒 萌絵（メグロ モエ）』選手である。2月22日現在は、日本チームは2勝2敗であるが、その司令塔として活躍している女性である。成功率85%という高い得点率を誇っている。

実際、試合中のモエ選手の表情を眺め



チーム青森の目黒萌絵選手

ていると、集中している顔がとても美しい。テレビでアップされた、真剣そのものの、目の輝きは何物にもかえがたい。女性ほど、ただ美しいだけではダメで、もつ一つの特別な能力が備わっていないと、『美人』とは言われないものらしい。『小野小町』の場合、その美貌のほか

に、和歌の能力をもっていた。

花のいろはつりにけりないたづらに  
我身よにふるながめせしまに

言つまでもなく、『花』は桜が第一義であるがそれから転じて、『女性の美しさ』を意味する。『よにふる』は、『世に経る』とか、『古』とか、『降る』などの縁語がある。『ながめ』は、『長雨』や、『眺め』に通じる。

歌の表の意味は

「桜の花の美しさはついに移り変わってしまいました。長い雨が降っている間に、隠された意味は

「私の美貌も失われてしまいました。世の中の苦勞に揉まれていた間に、もはや昔の面影はありません」

掛詞（カケコトバ）や縁語（エンゴ）を駆使した、技巧的な力作であるのが容易にわかかれる。小野小町もこの小倉（オグラ）百人一首の歌によってこそ

伝説化された美人の地位を得たに違いない。

整形美人が最近が増えてきた。単に「一重瞼」が「二重」になったり、低い鼻を高くしただけの美人ではなくて、最新の美容皮膚科では、ボトックスの注射で、皺を消したり、ヒアルロン酸液の注射で皺を伸ばしたり、レーザーで『あざ』や『ほくろ』や『しみ』や『瘢痕』を消したり、自由自在である。化粧液を塗って消す作業が不要になるから、毎朝化粧に使う時間を大幅に節約できるのも魅力らしい。『整形美人』の定義も相当変わったのではなからうか。スツピンの定義も変化したに違いない。

映画の『ローマの休日』で主演した、オードリー・ヘップバーンも実に美しく、今見ても、大きな魅力的な鼻、唇など十分に魅力的である。でも、55歳になって、来日した彼女の姿を見てガッカリしたファンが多かったのではなから

うか。高い鼻は、意地悪な悪魔のおばあさんを連想させたし、瘦せた表情は、ただ皺が多い老婆の姿そのものであった。『花の色はつりにけりな』は、実に残念ながら、そのままではまっていた。

## 蝶と私の物語 第二話

チョウ大好きオバサン

大塚 博 太

その人は、我が家のすぐ近くに住む患者さんなのです。そして私が蝶が好きだと知ると、図鑑を携えてこまめに診療所を訪ね、診療はそこそこにして蝶談義にと嘯は進んで行くのです。

そのオバサンの家には、犬が4匹飼われています。そして毎日朝、タ2回2匹ずつを連れて上野の山、不忍池に散歩に出かけているのですが、そこに生えている木や草の名前は、聞けばすぐに教えてくれる程の植物通なのです。そして蝶に

於いてもまたしかり。所持してきた蝶の図鑑を見せて貰いましたが、書き込みの跡も大変なもので、よく読まれておりその博字振りには正に脱帽です。

そのオバサンがある日（詳しくは十月六日）、蝶の幼虫（クロアゲハ）とその幼虫がついているカラタケの枝を、育てて「ごんなさいと持ってこられたのです。

以前、蝶を育てたこともあり、私は喜んでお受けしたのです。

早速、虫籠に入れて様子をみてみると、幼虫は一週間もしないうちに蛹に変わっていきました。何もしないで様子をみていて大丈夫ですよと言われた言葉を忠実に守って、じつと黙って蛹を見ているのですが、不安も伴つ毎日です。

十月十九日、オバサンよりジュランダを一鉢頂戴する。蝶の好む木でどんどん大きくなること。大きくなつたこの木に蝶が群がり舞う姿を想像し、夢の世界に没頭しているのが、この所の私の毎日の姿なのです。

表紙の言葉

大武 秋笙

(茅ヶ崎市)

「新緑の奥多摩」

昨年六月初旬、奥多摩で撮った写真の一枚です。東京都医師歯科医師協同組合写真同好会の日帰り撮影会に参加した時のものです。

梅雨のはしり連日小雨模様が続く中、幸いに降られず日中どんよりとした一日でした。撮影には不向きな天候です。バスで寺や花園、溪谷を廻りましたが、ものになりません。光が欲しいと思いました。

夕方最後のポイント奥多摩湖に行く車窓の両側は濃い緑、時々湖面が樹間から見える。東京にもこんな所があるのかと感嘆するのは小生のみではなかった。山も湖も緑の中に真赤な橋がかかっていた。三脚を立てうんと絞って撮りました。

(第39回医家写真展出品)



の字体が鳥を意味していた。また雄（おす）と雌（めす）も佳の部首に属している。本来は鳥のオスとメスを指しており、獣のオスとメスは牡と牝で表わす。ゆえに鶏のオスとメスは雄鶏、雌鶏と書き、牛のオスとメスは牡牛、牝牛と書き分けらる。

史記という中国古典に「燕雀安知鴻鵠之志佳哉」という漢文が載っている。「燕雀いすくんぞ鴻鵠の志を知らんや」と読み下す。燕と雀は小型の鳥であり、鴻と鵠は大型の鳥である。小人物には大人物の遠大な志が理解できない譬えである。短い文の中に鳥の名前が四種類も登場する。

莊氏という古典に「鶴脰雖長断之則非、鳥脰雖短続之則憂」という文章が載っている。鳥はカモの仲間の水鳥である。鶴の足が長いからといって切り取ってしまったら鶴は悲しむ。カモの足が短いからといって継ぎ足してやればカモは迷惑がる。という大意である。物にはそれぞれ自然

に備わった特性があり、他からむやみに手を加えるべきではないという譬えである。

論語の泰伯篇に「鳥之將死其鳴也哀、人之將死其言也善」という文が載っている。鳥のまさに死なんとするや、その鳴くや哀（かな）し、人のまさに死せんとするやその言や善しと読み下す。死にかかっている鳥の鳴き声は悲しみに満ちている。死に臨んでいる人の言葉は真情から発するから善言が多い。

史記という古典に「鳴鵠吠狗烟火万里」という文章が載っている。狗は犬を、烟は煙を意味する。鵠が鳴き、犬が吠え、民家から立ち昇る煙（かまど）の煙が万里の遠くまで続く。太平の世の中の形容である。

論語の陽貨篇に「割雞焉用牛刀」という文が載っている。鶏を割（さ）くにいすくんぞ牛刀を用いんと読み下す。鶏をさばくのには牛を解体する大型の刃物が必要だろうか。簡単な事をやるのに必要以

上に大袈裟な手段を用いる譬えである。また史記に載っている「為鶏口吻為牛後」という文にも鶏と牛が同時に登場する。鶏口となるも牛後となる勿れと読み下す。略して鶏口牛後とも言つ。

「鳩有三枝之礼、鳥有反哺之孝」という漢文を教わったことがある。子鳩は親鳩より二本下の枝に止まる礼儀を心得ている。反哺は口移して餌を食へさせる行為である。鳥の子供は年老いた親鳥に口移して餌を食へさせて孝養を尽くす。鳩や鳥でさえ礼儀や孝養を心得ている。だから人間も……という教訓である。では次に鳥が登場するドイツ語の格言をいくつか紹介してみたい。

Die blinde Henne findet auch wohl ein Korn.

「盲目の鶏でも穀物の粒を見つけろ、」  
盲目の鶏でも片端から地面をつついていれば、時には穀物の粒が口に入る。積極的行動は善なりという譬えである。  
Die schmal be nacht noch kei nan

Sommer.

「一羽の燕は夏にならぬ」

一羽の燕を見ただけで即座に夏が来たとは断定できない。性急な判断の戒めである。

Vogel von ei ner ei Feder n fili egen

ger n bei sammen.

「同じ羽の鳥は好んで群れて飛びたがる」

ドイツ語版の「類は友を呼ぶ」である。

Hennen, die k r ahen wie ein Hahn,

Bi ngen denthuse Uyg l uck.

「雄鶏のように鳴く雌鶏は家庭に不幸を齎す」

雄鶏は大声で時を告げ、雌鶏は小声で「

「」と鳴くのが普通である。雌鶏が雄

鶏のように鳴く家には災いが来るという

迷信が西欧各国にある。妻が夫を差し置

いて権勢を振るう家庭は不幸という意味

である。ヨーロッパでは女性上位が通用

つなごうていふ。

Hinner, die vi el gacken, I egen kei ne

Or.

「があがあ喧しく鳴く雌鶏は卵を産まない」

口だけ達者で行動力のない者の譬えである。法螺吹きに限って能無しである。

幼い頃に「金の卵」というドイツン物

語を読んだことがある。ある男が毎日一

個ずつ金の卵を産むガチヨウを飼ってい

た。ある日、その男はガチヨウの腹の中

に金塊があると思ひ、ガチヨウを殺して

腹を裂いてみたら、普通の内臓だけだっ

た。目先の利益だけに捉われて、将来を

見据えた長期展望を欠くという寓話であ

る。

日本語では金の卵を、将来が大いに囁

望される有能な若者の比喩として使って

いる。医学生の頃に「医者卵」と言わ

れたことがある。孵化し、雛となり、や

がて一人前の成鳥になると期待されている

若者を卵に譬えている。資格を取得し

たばかりで、また実地の経験が乏しい駆け

け出しの専門家は「ひよこ」に譬えられ

る。大学を卒業して社会人になると、学

窓を「巣立つ」と形容する。鳥の雛が巣

を離れて空が飛べるようになる行為に譬

えている。実力はあるが発揮する機会に

恵まれないと「泣かず飛ばす」と形容す

る。鳴くも飛ばすも鳥の習性である。

卵、ひよこ、巣立つ、はばたく、鳴か

ず飛ばすなど、人間の成長過程を鳥に譬

えた慣用語や成句が多い。我が家の庭で

ジョーヒタキを観察したのが契機となっ

て、鳥が登場する漢文やドイツ語の格言

や日本語の比喩的表現を列挙してみた。

余談だが、受精していないために孵化

しない卵を無精卵と呼ぶ。私は素人随筆

家の卵です」と発言すると「無精卵だよ」

と取(けな)されるに違いない。蛇足だ

が、億劫がつて何もしない怠け者と同じ

漢字を書いて無精者と呼ぶ。私は文筆の

才能に関しては無精(むせい)卵で、性

格的には根っからの無精(ぶしょう)者

だと思っている。



## ジェノヴァ懐古旅行(2)

美濃部 欣平

ジェノヴァから、一番有名で近い観光地はポルトフィーノであった。ポルトフィーノへは、船で行った。船からの港を望む眺望が美しい。ここには世界中の大金持ちが集まるといふ。しかし、その実態は、貧しい土地の漁師が底網漁業をして日夜の糧をしのいでいる。私の電気生理助手が、ネルヴィーに住んでいて、よくそこまで、電車が



コロンブスの生家の記念館



ジェノヴァの旧港の近く、アーケード通り

バスで仕事のない日曜日には遊びに行  
った。

この技師のペッツ君と、ロサンジェルズで再会することになった。このときはわからなかった。私はミネソタ大学の薬理学教室へ留学するため、未だ行ったことのないロスを通過して、ミネアポリス遂行くつもりだった。ロスには、ミネソタ大

学医学部出身の日系カルフォルニア大学教授・シヨウ・山本を日本で友達から紹介をつけ、自宅へミネソタの情報を求めて訪問した。私はロス滞在中は、ペッツ君の下宿に泊まらせていただいた。  
ペッツ君は、職を求めているので、私が教授と会つのを知り、一緒に同道を求めた。ところが、お見えになつた



フェラーリ広場からヴェンティ・セツテンプレ大通りへ



フェラリー広場の噴水の前で筆者

のは、医者ではない教授の奥様だったが、ベッツ君はアメリカの何処かへ脳波技師として働けるよう依頼した。結局は、英語も十分通じない彼の依頼は無理だった（後に脳波技師にも、免許をとる試験に合格して、資格があることが分かった。私をポルトフィーノまで連れて行ってくれたのは、ジェノヴァ大学の精神科医の夫妻だった。妻の精神科医は、友達もいなくなつた私に、合唱団へ入会するよつ

世話をしてくれた。この合唱団は男女混声合唱団で、私は第一テノールのパートをいきなり受け持たされたが、未だイタリア語も十分出来ないのに、目立つ第一テノールは、一人で先導するところもあるので、残されて指揮者の個人教授を受けた。



港に展示してある海賊船（乗船はできない）

このグループへ参加することで、沢山の仲間が出来た。仲間には、町の図書館に働くものや同じ学生寮に住む牧師さんの娘がいて、よくジェノヴァを取り囲む山々へのハイキングに誘われて参加し、娘さんを通して多くの知人を紹介された。このグループは、ジェノヴァの郊外、近隣の町へ出かけて公演し、遂にはミラノラジオ放送局で放送することになった。その時のテープは、未だに私の机の引き出しにねむっている。その中には、日本人もいて逆に通訳することもあった。ジェノヴァへの日本からのダイレクト航空便はない。留学のときは、イタリア船と間違つて、オランダ貨客船を予約した。帰国のときは、政府留学生には、船便に限り、割引があることを知り、ジェノヴァ発の豪華客船の特別二人部屋を予約した。船便は香港までしか行かず、香港に初めて立ち寄り一週間あまり滞在することになった。

## 開業ABC (14)

中村 雄彦

### 銀行の支店長

私の父は地方銀行（新潟市に本店のある第四銀行）の常務取締役を長く務めていた。母方の祖父もこの銀行の副頭取だったので私が銀行に入れば二代目になる。

父はもともと東京麻布の地主の長男で、経済的に困らなく、東大経済学部を出ても定職につかず自宅で小説などを書いてぶらぶらしていた。しかしその後旧制新潟高校を出たのが縁で新潟の銀行に就職することになる。そして東京に家があるので銀行入後も麻布の自宅から日本橋の東京支店に通っていた。私も東京に生まれ、戦時中の学童強制疎開で新潟市の母の実家に寄留するまでの10年間東京の麻布に育った。

父は重役になる前の若い時は色々な支店の支店長を歴任していた。戦前でも銀

行は鉄筋造りだった。たとえば会津若松支店は小さいながら鉄筋2階建てで同じ敷地に支店長宅があった。若い行員が昼休みにピンポンやキャッチボールで子供の私と遊んでくれる。母が女子行員達を自宅に呼んで昼食をご馳走する。当直の男子行員が夕方お風呂を買いに来る。夜は取引先の客達が酒を提げて遊びに来る。スキ焼きをご馳走されて父と雑談。子供の私も相伴。父はこうして色々な人達から街の情報を得ていたのである。私も小さいながら自然に銀行業務について分かっていったようだ。

今はどうなっているか知らないが、時々現送といって支店に入金した現金を新潟市の本店に運ぶ作業がある。朝早く若い行員と事務員の二人で大きいリュック・サックに金を入れて汽車で出ていく。夜遅く無事帰ってくるまで父は心配して起きていた。コンピュータの無い時代、計算はすべて算盤。一円でも収支が合わないとい行員全員が遅くまで残って仕事を

していた。

父は2、3年で転勤していたが、支店長は今のようにつらな頻りに変わらなず、長い人は10年も同じ支店にいた。当然馴染みも出来、固定客も生まれる。

残念だったのは、東京支店長は重責といつことで代々重役が勤めていて、支店長の社宅は渋谷の松涛の女優の山本富士子さんの家の隣にあった。私は既に大学生だったが、夏休みに東京に帰省して回覧板を持って山本さんに会いに行こうと思っていたが、どうした訳か父は東京支店長にならなかつた。今でも惜しいことと思っている。

このように昔の銀行は親身になって客の面倒をみていた。今のように真ぐに担当が替わり、ドライな対応はなかつた。昔の銀行はよかつた。顧客を大事にし、親身になって経営のアドバイスをした。大切な預金者のお金を有難く預かつた。いたずらに古いものがよいわけではな

いが、今の銀行は悪い。まずコンピュータを駆使して全てを機械化するため、血の通わない業務となる。客の顔も知らない。

「ここで私の平成14年に銀行の悪口を当地の医師会報に書いて好評だった文の一部を引用する。」昭和60年代のバブルの責任の一端は過剰貸付けを行なった銀行にある。ゼロに等しい金利の預金者の金差、借り手に高利で貸す。銀行員は金を扱っただけだから安月給だと悪いことをしては困るといって昔から高給だった。昭和30年代なかば地方銀行常務取締役の父の月給は24万円、父と同年配の私の恩師新潟大学皮膚科主任教授の給料は月6万円、大学教授の薄給は今も同じだが、それにしても銀行員は高給である。

機械化の現在誤りはないかということ大いにある。優良とされる取引先の地方銀行で一度ならず通帳に預かりと支払いを逆に記帳した。致命的なミスである。支店長が謝罪するどころか間違った本人も

平気な顔をしている。

潰れる銀行も僅かながらあるようだが、当然である。政府の保護の下めくめくと生き延びている銀行はもっと潰すべきである。悪事の塊の銀行はまず相手にしないこと。預金はゼロは無理だが、出来るだけやめる。そして借りない。借りても



家族と(昭和47年6月)

額は僅少に留め、直ぐに返す。この低金利時代、デフレ基調では借金は損である。……」。

それから7年たったが、今回アメリカ

カのサブプライム問題で世界経済は揺れている。マスコミはここを先途と囃し立てるが、普通に暮らしていれば大した事ではない。世論に左右される必要はない。平常心が大切だ。

銀行に限らず、全ての企業が金に振り回されている。もっと血の通った仕事をしろといいたい。不況、不況といえども騒ぎ立てることはない。

「医者には患者の痛みを知れ」とまくし立てるなら、企業も親身になって相手の立場を考えて仕事をやるべきだ。若い人を指導する立場にあるトップは十分に自覚して欲しい。

どのような職業でも楽ではない。そして皆さん懸命に仕事に取り組んでいるのは分かる。とにかく医師は勿論、全てにいえることは、目先にとらわれず広い視野で世界を見渡す、それには長い修養期間と、絶えざる勉強、深い教養が必要である。生半可の勉強、教養では通用しないのである。

# 石北本線

御園生 潤

「網走ですか?」JRでなら泊しないうと無理ですね」と若手出張医のN先生に「ずしりと釘を刺されたため、初冬の石北路を1泊2日で旅することになった。若手の同僚O先生は「初冬の網走とは味のある旅だ」と羨ましそうです。

旅程は、よつやくとれた「秋休み」の昨年11月25〜26日。乗車したのは往路がオホーツク3号、帰路がオホーツク4号だった。オホーツクは人気列車で満席の日も多いが、今回は往復とも何とか窓側の席を確保できた。

札幌駅7番線から9時41分発車、約1時間半かけて旭川へ到着する。最新鋭の電車特急スーパーカムイなら1時間20分で走り抜ける区間なので、ややスロウな感じだが、運用車両の最高速度の違いで、このよつな差が生じる。オホーツク

の運用車両はキハ183系で、北見峠、常紋峠と2つの急峻な峠を越えるのに必要なパワーを有しているが、昭和50年代製のものも含まれ、いささか歴史を感じさせる古参車両である。

札幌では雪はなかったが、岩見沢を過ぎてからと旭川の手前から、散布したような積雪の名残が所々に認められた。嵐山トンネルを過ぎると旭川の街並みが目の前に広がり、家々の屋根には夜間降ったと思われる残雪が見られた。

旭川駅は1、2番線をスーパーカムイ優先に使用しており、石北、宗谷本線の下り特急列車は3番線に入る。5分停車。

旭川からはしばしの間高架となり、旭川四条駅を通過して宗谷本線と分かれる新旭川駅へ向かう。駅の手前でロングレールから通常のレールに変わり、まもなく制動がかかって、ポイントをわたり石北本線に入る。力強く加速し、規則正しいジョイント音を刻む列車は、まさに一口カル線をゆく特急列車の感がある。上

り普通列車が待つ桜岡を通過、当麻のあたりからは次第に積雪量が多くなる。刈り取りが終わった水田や畑の土と雪の白がコントラストをなし、美しかった。

上川に12時ちょうど着。次の中越(なかこし)信号場では上りの特急待避で7分停車(運転停車)。札幌から網走まで通し常務の車掌Fさんの全て肉声で味のあふる丁寧なアナウンスが入る。駅間距離の長いローカル線であるため、ダイヤを工夫してもこついつたことが少なからず生じる。上越信号場を過ぎ、分水嶺の長いトンネルを抜けると、下り勾配にさしかかり、制動をきかせながら、心地よいジョイント音を楽しむ。

プッシュプル運転(前後にディーゼル機関車がついている)で急勾配に供えたコンテナ満載の貨物列車を待たせて白滝を通過。丸瀬布の次は遠軽に停車。接続する普通列車が見えている。方向転換スィッチバック)するため、運転士は最前部から最後部へ移動、乗客も座席の向き

を交えるのに忙しい。

常紋峠のトンネルを越え、右手にスイッチバック形式の常紋信号場がちらりと見えた。留辺蘂を過ぎると国道39号線と並走、相内(あいのない)、東相内と通過し、北見到着のアナウンス。踏切解消を主目的に設けられた北見トンネル



網走駅前郵便局の風景日付印  
(モチーフは斜里岳、  
流水、ニボボ)

を抜け、定刻に北見着。ここで上りオホーック6号を交換。

この後は美幌、女満別と停車、やがて現れた初冬の網走湖を眺め、5時間28分の旅が終わった。

今回の旅行では、標高による冬景色の

差異が見事で、上越信号場あたりの風景はまさに冬本番をつかがわせるものだったが、低地に降りるに連れ積雪がなくなり、同線の起伏、勾配のきつさ、厳しさを目の当たりにした感がある。

石北本線と私の関りは昭和56年6月に始まる。旧型客車時代の夜行急行「大雪(たいせつ)」で美幌駅に降り立ったのは、家族で向かった大学祭の休みの道東旅行の時だった。当時、わが家は、父方の親戚縁者との財産にまつわるトラブルに巻きこまれ、四面楚歌の状態にあった。若くして我が家を有したものの様々な形で圧力・屈辱を向けられた今は亡き父も自分の判断力の甘さの原因とは言い、大いに悔いたことである。私自身も、医学部の年次が上がってゆき、同期が次々と専攻科目、研修先を決めてゆく中で、自分の足下が定まらず、将来について熟慮する状況におかれず、もたえ苦しんだ。

病理学講座の大学院生として卒後のスタートを切ったのは、一種の「モラトリウム」であったが、次第に臨床病理の勉強にひかれて行った。病理医としての将来を見すえていた時に、自分の体況に大きな欠陥があることが判明し、途方に暮れた。指導教官が教授選で惜敗したことに加えて、私自身が一人っ子であるなど悪条件が重なった。

生まれ育ったわが家から逃げるように去り、現在地に新居を構えたのが平成3年7月。大きな無謀とも言える賭けであったが、何とか勝ち、今日に至っている。件の親戚とは完全な絶縁状態に至っているが、その身内には不慮の事故死、若年での病死などが続き、過去を知る人は「因果応報」と、わが家びいきの評価をしてくれるが、わが家の心はずきりとは晴れない。生まれ育った家も平成9年7月に非常に難航した交渉の末、立ち退き、取り壊しとなったが、その際、約6年間他人に賃貸していたとはいえ、幼

少期からの様々な思い出と、何本もの思  
い入れの深い樹木がともに同時に破壊  
伐採された時の悔しさは家族皆が生涯忘  
れないものであろう。

一方、現在の勤務先病院の入院患者の  
家族・親類の中にも、評価の手厳しい看  
護師たちをつならせざるほどの結束力を発  
揮して、老親・兄弟等の世話に励む家系  
もあるから、恥ずかしながら、わが家系  
は、こつした点では未熟であったと言わ  
れても致し方はなからう。

こつした青春期の苦悩・困惑・矛盾を  
癒そうと、私が現実逃避にふと飛び乗っ  
たのが、「オホーック」「おおとり」「大雪」  
といった石北本線の特急・急行であり、接  
続する普通列車に乗り換えた晩冬のつら  
らかな「各停」の旅は、登場間もなかつ  
たキハ40型気動車の走行音と共に生涯  
の思い出である。

当時、開業医の二世などの裕福な家庭  
に育った同級生は、入学直後から、自家  
用車を有し、恋愛に励んでいた。こつし

た世界は私にとって異次元の世界に映り、  
自宅でも講堂でも安堵感を持って生活し  
得なかつた。最近になり、当時から現在  
に至る私を含めた親戚問題による精神・  
心理的動揺、障害を生じせしめた因果関  
係が少しずつ洞察できるよつに冷静にな  
つてきた。

「認定病理医資格まで取つて（転料し  
てもつたいない」と知人の医師からは  
わが家の歴史を知らぬが故に、こつした  
言葉をいただくが返答に窮しているとい  
うのが本音である。

今回の道東（オホーック）訪問は3年  
9ヶ月ぶりであったが、今後は、価値観  
が近似、お互いに了解し合えるような身  
近な友人をもつと開拓し、良き「メンタ  
ー」として、これからの生涯の財産とし  
てゆこつと考えている。

.....  
（本文の前半部分を、北海道医療新聞社  
の許諾を得て転載させて頂きました）

## 孝謙天皇と奈良西大寺

田村豊幸

1

平成十二年 孝謙天皇遠忌千二百三十年

記念して西大寺に万葉歌碑建立

平成十二年 脳卒中でバツタリ（馬鹿働

きで過労のため）

平成十四年 左半身回復して現在に至り

老衰は停止せざるも、日本大学より

本年一月「桜門春秋」に自由題で執

筆依頼され、「孝謙天皇」の題で次の

文を書きはじめる。

歴代の天皇のなかで、医師の技術が低  
下していることに心を痛められ、いまし  
めの詔を発せられたかたに、第46代孝謙  
天皇（749～758、重祚して称徳大  
皇764～770）があられることは余  
り知られていない。

天皇はご自身の難病を、唐から渡来し



た薬石と心の手当ての巧みな看病僧のおかげでよくなって以来、医療に深い関心をお持ちになられ、以前からあった大宝律令典薬寮（くすりのつかさ）を通じて誤診誤薬をいましめられた（天平玉字元年・757年十一月九日）よつである（以下略）。

おりもあり、万葉歌碑でお世話になった故大養孝先生第一の高弟、甲陽学院高等学校山内英正教諭から四月一日より、万葉歌碑めぐり講座が始まることを知ら

奈良の歌碑（ ）は歌人  
西大寺（孝謙天皇）  
歌姫神社（長屋王）  
磐之媛陸前（中臣女郎）  
大仏殿西回廊外側北西（光明皇后）  
東大寺真言院（大伴家持）  
春日野荘（大伴坂上郎女）  
佐保川北岸（大伴坂上郎女）  
佐保川南岸（大伴家持）  
佐保川南岸（大伴坂上郎女）  
油阪・西方寺（山上憶良）

され、西大寺の孝謙天皇歌碑がその第一番に入っていることがわかった。歌碑めぐりはAコース10箇所、Bコース10箇所である。平城京遷都二〇〇年祭で、年十二回、大養万葉記念館に協力する会の講師が案内してくれるそうだから、一回五〇人に入れた人は幸運である。



西大寺境内に寄進できた歌碑

当時、孝謙天皇歌碑を寄進することを考えたが、西大寺境内という場所が場所

2

だけに、それを建てることは現状変更になるため、文化庁の許可がなかなか下りないのではないかと思っていた。しかし、あの世から天皇がお力をくださったのかあるいは私の知らないなどなたかのおかげで、建立の許可をいただいた。翌年倒れる前のことだった。

3

最近、長身の女性が今年も両親と一緒に行って来ましたといつて、写真を送ってくれた。

改めて調べてみると、孝謙天皇は藤原一族のご出身で、藤原は元をただせば關東出身の説もある。側近に仕えた采女の中には貴族たちにひそかな恋を抱くものもあったことが、万葉集からつかええる。

宮廷生活で垢抜けした采女が、郷里へさがったとき、都からの官人を迎えて国司が催す宴席には、父兄の郡司らと出席して、席をとりもつこともあった。永く都にいて教養を身につけ、女官に昇進す



ることもあつた。「続日本紀・神護景雲二年六月戊寅条には「掌膳常陸国筑波采女従五位下勲五等生宿禰小家主」とあつて、この女官は平城宮址から出土した木簡に、小豆・醬・酢・未醬など四種ものを筑波命婦あてに支給すべしとある、その筑波命婦同一人であるといふ。

法華寺から宮内省大膳職あてに出した請求伝票で、この人は近江保良宮から帰つて法華寺に入つた孝謙天皇につきしたが、その御膳を担当し、のちに帰国して国造に任ぜられている。国立文化財研究所・平城宮発掘調査報告 に、そのことが明記されている。

これは、物凄く出世である。このよつな筑波国造が、おつかえしていた孝謙天皇や、天皇に忠義をつくしていたら削道鏡を、常陸国へ帰つてきて、悪くいはずはない。

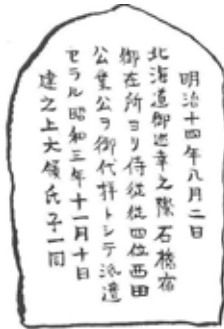
後世にいたるまで、いまの東茨城郡あたりの常陸国が孝謙天皇とその協力者の道鏡をあたたかい心で見ると風土になつた

のは、采女から国造に駆けのぼつた、常陸国筑波山の近くに生まれた“采女の恩返し”と私は信じた。

孝謙天皇は、当時その身のまわりをお世話する采女といふ、地方豪族から宮廷に捧げられる美女がいた。男の天皇が住



明治天皇が侍従に代拝させた記念碑



む所を内裏といひ、皇后らの住む所を後宮といひ、後宮には有位の女官と、各種雑役にしたがう女嬪・采女がいた。采女

は地方の郡の少領以上の伝統ある豪族の姉妹や娘たちの中でも、特に姿の美しい女で、広義の女官には上から尚・典・掌・女嬪・采女の階級があつた。諸国から年に百余人の女が貢進されると、中務省の采女司の点検を受けた。

点検は凶相と吉相に区別し、前者には白目がちで黒目の小さい女、真直ぐに歩けぬ女、舌が大きく頭の大きい女などが該当し、後者は、ヒフは滑らかに潤い、肉つきよく、正直で心と口が和やかで声のきれいな心の優しい者がえらばれたと記録にある。

4

その頃は今の北関東に余り考えられないよつな女が、珍しくも発見されて、関東の大河を経て舟で都へ送られていたらしい。海路は季節によれば陸より安全だつた。

孝謙天皇は天平宝字三年三月七五三に、詔を下して庶民の酒飲みをいましめ、

このころ道理にそむくことが多いのも、そのせいが目立つといっておられる。立派な詔である。

孝謙天皇は歌心も豊かで万葉集を大伴家持に命じて編集させておられる。大伴氏が酒歌を万葉集に十三頁も加えているのも面白い。

このたびのなら万葉歌碑めぐり講座の中の西大寺の所では、以上の話も少し役立つかもしれない。

なお、栃木県下野市石橋には、孝謙天皇神社という立派な神社の境内に「孝謙天皇」の碑がある。明治天皇が東日本宣撫大旅行の途中、かわりの者に参拝させたほどの史蹟もそこにある。下野国からも孝謙天皇におつかえした采女がいて、帰国後、孝謙天皇の豊かなお心に感謝してご供養のために建碑したものが、誤り伝えられて天皇御陵と称されているのである。明治天皇はそれを御存知のうえで、西田侍従を命じて代拝させたものと思はしい、明治天皇のお心の豊かさを想

うのである。

ちなみに、いまも采女の子孫かと思われる数人の一族が、石橋に住んでおられる。そのうちのお一人は、私の大学の後輩であるから、不思議な縁というよりほかは無い。

## 小説作法講座

作家 伊藤桂一氏から学ぶ

浜名 新

「タイトル」は、読売日本テレビ文化センター荻窪で開催された「文芸・教養」講座のひとつです。私は還暦を過ぎる頃、専攻の脳神経外科診療の忘れ得ない治療体験の文章を書きたくなりました。新聞で当該講座を知り、申し込みをすると満員でした。諦めていると2年後、講座担当のNさんから「欠員ができましたが入会できますか？」と電話があり、直ちに手続きをしました。確か平成13年の頃です。

私は28年間勤務した都立病院を退職し、平成16年4月から「回心堂第2病院」

内科へ転向し、長期療養刑病院で「終末期医療は延命治療」との考えを実践し、「死」を身近に体験し、「死」をテーマにするような作品を心がけるようになりました。

本講座は実作者のための講座で、「自分の感情や考え方を文章で表現したい気持ちを持っていてその機会が無く、また作品を批評してもらえない方もない方たちの教室です」とあり、小説・随筆・紀行・コント・詩等、提出枚数は約20枚でした。作品を提出すると次回の講座で、伊藤桂一先生が査読された1枚の講評を会員は受けとり、先生はその場で作品を解説・講評するシステムでした。先生は、作品にまつわる話題、閑話休題の話などを会員をひきつける最大の魅力でした。温厚な人柄で敵を作らない、運命に逆らわない、自然体の生き方が信条と承っております。

入会当初、会員諸氏のつまみ文章を拝見し、たじたとりました。手馴れた

文章に圧倒され萎縮しました。作品を提出しなければ講評を受けられません。

恥も外聞もなく、勇気を出し、自分を晒けだして、その頃ハイキングの会に参加していた関係で、旅行とか山行の行動的記録文の作品などから入りました。少し慣れてくると、体験的脳神経外科の臨床治療における患者・家族と医療関係者、主に医師などとの心理的葛藤を浮き出すように心がけました。治療体験では、そのまま記述するわけにもいかず、フィクションを交ぜ、手術・術後の出来事についての、現場の医師の嘆き・呟きを拾うように工夫してみました。外科治療には悩ましい合併症がありますので……。

アマチュア作家？ の手慰みに過ぎませんが、「新風舎」から「くも膜下出血」のバトル、大谷明氏の場合、「銀色のクリップ」水谷勝治氏の場合、「谷川岳滑落事故 高次機能障害から復活できるか」、「老老介護と安息病棟 医師と看護師の苦悩と呟き」の小著を自費出版でき

ました。非常に残念なことに、時流に乗り順風満帆だった「新風舎」でしたが、倒産に追い込まれてしまいました。版權は「文芸社」に引き継がれ、再度出版を誘われましたが、パスしました。

伊藤桂一氏はあまりにも有名な現役の詩・短歌・連句・小説など幅広い分野で長年にわたって活躍されてきた作家です。戦記作家としても有名で、現在92歳で、これからも戦中世代の代弁者として、「戦記の仕事をしなければならぬ義務がある」と熱き情熱を常に語っておられます。健康に留意され、活躍を祈念申し上げます。

先生は大正6年三重県三重郡神前村天台宗高角山大日寺に生まれ、昭和12年徴兵検査甲種合格、翌年習志野騎兵第15連帯入隊、昭和15年晋南作戦(中国)に参加、短歌200首作る。昭和18年佐倉歩兵157連隊に召集・出征(中国)。

昭和21年佐保へ復員。昭和23年上京。詩小説作品発表表「昭和37年、蛍の

河」で直木賞受賞。昭和59年第3回芸術選奨文部大臣賞及び第38回吉川英治文学賞受賞。紫綬褒章。昭和60年日本現代詩人会会長。平成9年詩集「連翹の帯」で地球賞受賞。平成13年日本芸術院恩賜賞受賞。日本芸術会会員。平成14年勲三等瑞宝章。平成18年四日市短詩祭文学祭に「伊藤桂一賞」制定。平成19年詩集「ある年の念頭の所感」で三好達治賞受賞。

21年四日市市に「文学碑」が建立された。伊藤桂一氏主催の「小説作法講座」(午後6時半から8時半)は2010年3月19日を以って終了。同日、講座に先立って会員主催の「惜別の宴」は、荻窪ルミネ5階にある京料理の店「錦」で和やかに執り行われ、伊藤先生から会員1人1人に「色紙」が手渡されました。私が頂きました色紙の「詞」に珠玉の歌が。

碧潭の水に抱きこめられたまま  
椿の落花はとめどなく朱を吐く

伊藤 桂一  
長い間ありがとうございました。

## 旅の記憶(1)

有泉 七種

小田原城

高齢となつて、解散してしまつたが、親しい仲間だけの集まりがあつた。同じ教授のもとで研究をかさね、その成果によつて、学位記を受領した門下生だけの集まりであるから、全員が医学博士。それだけに、昼の勉強会は活気にあふれた討論で終始した。そして、夜の、置酒歡談の席は、更けゆく夜の、時を忘れるほどに、親しく、楽しい、語らひの場であつた。

昭和四十四年の春の会合は、箱根の湯元のホテル。帰路、小田原市内を見物することにした。小田原提灯とか小田原評定とかいふが、小田原は「城」である。戦国時代から、不落の城といわれているように、権力と財力と支配力と、そのままの威容である。シーズンにかかりな

く、見物の人々の雑踏であるが、それにもかかわらず、城の周囲の堀は澄んだ水をたたえ、老松が常緑を映し、緋鯉真鯉の群が彩りをそえて、折からの、春のそよ風にひかりかがやいていた。

風光る陽春のころ。人工建造の城ながら、長い時代の流れの中に、周辺の自然にとけこんで、平和、そのものの眺めであつた。

松の風堀に光りて鯉を育て 七種

高遠城址の桜

春宵のひととき、ゆきつけの居酒屋は、常連でにぎわつていた。折から、桜の花の咲くころ。その花の名所や花見の宴の様子など、さまざまな話題で談論風発そんな時、たまたま、伊那の高遠城址の桜が話題になつた。

確かに、伊那の高遠城址は桜の名所である。それだけに、桜のころともなれば遠近からの観桜の人々で雑踏し、花の下は放歌乱舞の酒宴で喧騒、心静かに、花

の美しさに遊ぶことは無理なのが実情であつた。ところが、居酒屋での常連の一人は、「高遠の桜を見るなら、早朝にかざる」と主張して、譲らなかつた。

ものは試した！ 出かけてみるか！  
と思ひ立つて、朝、四時起きして、高遠へ車を走らせた。

まさに夜明けだ、高遠城址公園には、三、四人のカメラマンが三脚を立てているだけで、ほかには、人っ子ひとりない。その静けさの中に、満開のコヒガンザクラが、明けゆく朝の、澄みきつた大気に映えて、深閑、そのものの姿。時折、きこえてくる三峰川の瀬音、その音に誘われるように、花上がちゅる。それだけが、静けさの中の動きであつた。はるかかの西空には、中央アルプスの残雪が、朝日にかがやいていた。

高遠のコヒガンザクラとは、また、なんと美しいことか!! 心にしみる眺めであつた。

老桜の咲きあふれたる夜明け空 七種

## 輪島の夕市

日本整形外科学会の学術集會は陽春の四月。会場は大都市が多いが、時には地方都市のこともある。そんな時は、学会での勉強もさることながら、終了後の觀光も楽しみのひとつである。

昭和四十七年の春。この時の学術集會は金沢大学。学会終了後、金沢の市街を觀光したが、やはり、金沢は、加賀百万石の城下町である。兼六園をはじめとして、古くからの伝統に培われた。おちつきのある奥床しい眺めであった。

翌日は能登半島の觀光。起点は輪島。ここは漆器の町であるが、朝市と夕市のにぎわいで知られている。觀光バスの都合で、朝市は無理であったが、夕市だけ見ることが出来た。

土地の人の話では、朝市に比較すると夕市は四〇パーセント程度の活況だそうであるが、それにしても、大きな市の盛況である。品物の大半は魚類と野菜類。折から、夕餉の買物どき。それに觀光客

も加わつての雑踏である。魚や野菜の放つ臭いと、人いきれの中に、売買の声かとびかい、活況そのものの眺めであった。そんな雑踏をはなれて、夕市の出口のちかくに、数種の切り花を並べて、一人の老婆が、黙然と座つていた。時に、暮春の遅日のころ。うすづく淡い光の中に、黄水仙の彩りが鮮明に浮かんでいて、北国の暮春の静けさが偲はれる眺めだった。魚臭はなれて夕市の黄水仙 七種

## 鳥居峠

村当局的事情で廃止されてしまったが、「芭蕉を偲ぶ鳥居峠の俳句大会」は楽しい俳句会であった。スタートしたのは昭和五十六年ころではなかったろうか。年ごとに参加者も増加して、長野県でも屈指の俳句大会までに発展したが、多分、村当局的の財政事情によるのであろう、廃止になってしまったのは残念である。

鳥居峠の俳句大会は、毎年、青葉若葉の季節。村役場の案内で、峠の道の吟行

を楽しむのが恒例であった。峠の道はトンネルが開通してから、廃道の状態ではあるが、晩春初夏の季節だけに、桐の花が咲き、山藤が咲き、朴の花も板の花も咲いていて、木立には、松蟬の音がゆたかであった。峠の頂には、昔からの、そのままの姿で、神様がまつられていた。もの書物には、「トオゲ」は、「タムケ」に由来するもので、旅人が供えものをして、旅の安全を祈願したところ。と、誌されているが、風化した峠神の姿には、昔の旅人たちの素朴な心がしのばれて、どことなく、心の洗われる眺めであった。松蟬や古りゆくものに峠神 七種

## 権兵衛峠

ある年のこと。木祖村主催の「芭蕉を偲ぶ鳥居峠の俳句大会」の終了後、権兵衛峠を越えてみることにした。

木曾路から伊那路への峠越えの道は、ゆるやかな上り坂であった。おそらく昔からの、「ヨサイアバヨ」の峠道では

なかる。林道を拡張したよつな、谷川にそつて、一部舗装された道路であつたから、周辺の風景を十分に楽しむことができた。

峠の頂上に近づいたころ、谷川にそつて、美しい白い花が咲きみちているのが目にとまつた。梅の花である。小梨の花ともいうそつであるが、大木である。その大木の枝いっぱい、白い小さな花が咲きみちて、折からの澄みきつた青空に映えているのだ。明るく、清らかな山中の眺めであつた。そして、その大木の根元に、「岩魚止り」と書いた、小さな木札が立ててあつた。溪流魚では、鮎の上流が山女、山女の上流が岩魚の生息地とかいう。とすれば、標高千メートル位か。梅の花といひ、岩魚止りといひ、折からの晴天のもと、清らかな谷川の響きの中に山気いよいよ身に迫る眺めであつた。梅咲いて岩魚止りといふところ、七種

(註) この権兵衛峠、いまはトンネルが開通している。

## 自戒五ヶ条

古賀 行雄

今年の元旦に、私は七回目の晩年を迎えた。

干支の当たり年だからと言って、特にいい年とは限らないことは百も承知、だがそれでも何となく縁起を担ぎたくなるのモ人情。

一、三十年にもなるだろうが、元旦の剣道の初稽古に参加するよつになつてから……年越しのお宮参りと、午前十時からの高校での初稽古をすませないと、御膳を飲み干す気分になれなかつた。今年も去年の歳末から気構えだけはしていたのだが、生憎のインフルエンザ騒ぎで今年は中止。当たり年の先行き不安が、早くも的中したかと、ちよつぴり気分が暗くなる。

松の内の所在無さに、日記に書きつけたものを清書して、机の上の壁に貼り付

けたのが、次のよつな五七五句。

キザな言葉で「自戒五ヶ条」と名付けたが「夢の五ヶ条」と名付けた方が適切だつたのかも知れない。

剣の道 まだ半ばなる 八十路かな

春風の 一閃夢みし 劍惠生

ままならぬ 観見自在の 劍の業

波立たぬ 懸待一致の 劍の業

禪門の 心外無刀とは これいかに

自戒五ヶ条

平成二十二年正月元旦 劍惠生

私は、小学校の二年生の頃から竹刀を振るよつになつた。もう七十年以上経つ。終戦後マツカーサーの指令で、剣道ができなくなつた約十三年間を除いて欠かさずに竹刀を振つている。

現在教士七段、これ以上は望むべくもないが、今まで私の心に刻み込まれている剣道の哲学が、上のよつな五七五に集約されている気がする。ただし将来にわ

たつて達成不可能な極意だけに、私にとつては「夢の五ヶ条」なのである。

私は、小学校の六年生の時に、京都の武徳殿で行われた全国大会に出場し、主将として団体優勝を遂げた。

その時、優勝して嬉しかったと言つより、心底ほつとした。何故なら、その時負けていたら、後で監督のどんな叱責が待っていたか、その方が余つ程心配だったのである。それ程、日頃怖い先生だった。今は亡き渋谷慶太郎先生、終生忘れ難い名前である。

稽古は勿論厳しかった。小学生四年生になると、朝の登校は夏冬午前六時から七時、始業時間までみつちり稽古、昼休みも食事がすめば走つて道場に駆け付けた。修業後は勿論、少し遅れても容赦なく叱声と罵声が飛んでくる。

基本稽古は集団的に仕込まれ、技の稽古は専ら高等科の上級生の指導であつた。一人の先輩に一人か二人の後輩が割り当てられ、後輩が強くなるとその先輩

が叱声を浴びる。だから、先輩も必死になつて私たちを特訓するのである。

手や足はアカギしや握りタコ(胼胝)で腫れあがり、容赦なく飛んでくる竹力の折檻に子供たちは悲鳴を上げた。掛け声が泣き声に変わつていくのである。

連続掛かり稽古で、手足はへとへとに萎えて、家路につくときは脚を引きずつて帰つた。しかし翌日になれば、しゃんと手足が伸びて足取りも軽くなるのが小学生。その辺の心身の状態を渋谷先生は十分に把握していた。

稽古の時、拳固で背中をグリグリこね回されると飛び上がるほど痛い。試合で相手の打突を躲せなかつたりすると、此の鉄拳が容赦なく背中をえぐる。ある日私は、ぶつさん(私たちは渋谷先生の事をそう呼んでいた)の気配を背中に感じた。怒声が鉄拳に変わるのには間違いない。私は、とつさに竹刀を振りかぶつた。とつんと後ろでにぶい音がして、「痛ッ」とぶつさんが頭を押さえている。

私は、急いで面を外し防具を脱いだ。「俺はやめる」と言い捨てて家路を走つた。

私は、学校へ行きたくなかつた。翌日から休もつと思つた。しかし、その夜からぶつさんの日参が始まつた。ぶつさんの母親説得である。折角ここまで強くなつたのだから、全国大会は優勝間違いない。何とか息子を説得してくれ」と懇願するのである。

結局私は、母親の説得に負けて再び竹刀を握ることになつた。

ほんの一週間程は、私に対する叱声はおだやかになつたような気がする。しかし喉元過ぎれば何とやらである。

試合稽古で小手を打たれたら小手を脱げ、胴を打たれたら胴を外して試合をせよと言つた。相手の後ろから雑刀で尻をつつ突く。構わず小手でも胴でも打つていけと命令するのである。

ぶつさんの怒りが頂点に達してくると、あたりに座っている剣士たちが互いに自

分の竹刀を後ろに引つ込める。ぶつさんは手当たり次第手近の竹刀を掴むと、容赦なく子供たちの尻を殴りつける。数回殴ると竹刀がグシャリと形が崩れる。自分の竹刀が崩れるのが剣士たちは嫌で竹刀を引つ込めるのだ。

今の世の中では恐らく考えられない過酷な訓練だった。後で考えて、きつと軍隊だつてこんな厳しくはないだらうと思つたほど。

全国大会で優勝しても、嬉しさをよりも安心感が優先したのはそついつ経緯からである。

こゝろは・ひつじ

吉野 則子

若いころはピアノ、フラメンコ、シャンソンなど洋ものばかり。最近  
は日舞、長唄など邦楽にめがめました。老後の楽しみいっぱいです。

(小虎九科)

子供時代の剣道修業については、この辺りでとどめよう。

私が医師になり故郷に帰り開業したら、間もなく昔の剣道仲間がやって来た。「市内で職域剣道大会をやるから出場してくれ」と言つのである。「ちよつと待つた。マッケーサー以来、防具も捨てて剣道の事は忘れてるよ」と言つたら、「いや防具は準備する。医者仲間で3人チームをつくるのに、一人足りないから」と言つのである。

防具の付け方も忘れていたが、何とか助けてもらつて試合に臨む。準備運動なしのぶつつけ本番だつた。

ところが、図らずもその日、我が医者仲間が優勝してしまつた。飄箏から独楽である。

それ以後だ、私の剣道意識が急に高まつたのは、新しく防具や稽古着、竹刀を買い求め、子供たちと稽古するようになった。診療の合間をぬつて、小学校

や後では中学校に出掛け、子供たちが高校に進学するよつになると高校の剣道場に通つた。

以来、今日までずっと稽古を続けている。

一週間に一回の稽古は現在でも欠かさない。相手は子供であつたり大人であつたり。私の剣道の師匠は子供たちであると言つてもいい。

その間、何とか五段六段七段と夫々一回でパスしたのは、かつてのぶつさんの指導の賜物だろつ。つまり基本動作をしつかり身につけていたからだつたと思つた。かつての優勝チームの仲間だつたH君は、小学校の教師になつたが、最後は東京で校長を勤めた。それまでは剣道防具をつけることもなかつたらしいが、定年になつてから急に思い立つて竹刀を握つたと言つ。そして、六段になり七段に昇格した。ぶつさんに教えられた剣道の基本動作が骨の髄から甦つた」と彼も言つた。



そつといえば、子供たちの剣道の姿勢や業を見ていると、その者たちの指導者の癖が判る。指導者の立居振る舞いが、いつの間にか子供たちの中に染み込んでいくからだろう。

私は、昔自分が仕込まれたように、子供たちにも勝負に勝つことを強要した。全国大会でもある程度の成績を残さないと満足しなかった。しかし今では、負け惜しみかもしれないが、勝つことよりも基本に沿った剣道をと指導しているつもり。矢張り私の歳のせいだ。

さて話を年明けの「自戒五ヶ条」に戻そう。

今日のある新聞のエッセイ欄に、世阿弥の「初心忘るべからず」の解説が載っていた。初心に「三つの「初心」がある。「是非ノ初心忘ルベカラズ」、「それを時々ノ初心忘ルベカラズ」、「老後ノ初心忘ルベカラズ」の三つ。

「是非ノ初心」とは若いころの成功と

失敗を忘れるなど言う意味らしい。「時々ノ初心」とは芸に慣れた中壮年になってうぬぼれないように、そして最後の「老後ノ初心」とは無理をして老醜をさらすなど言うことらしい。

どうも、私の年代はこの三番目に該当するようだ。大いに思い当たる節がある。若い頃から、一陣の春風がさつと桜の花を散らすように、剣の一振りや相手の面を仕留めたい。また「燕返し」のように返しの早業で相手の胸を奪いたいと夢見ていた。それは今でも変わりはない。この歳にとつてはできもしない相談だが、頭で夢みるくらいは世阿弥にも許してほしいと思ふ。夢だけだったら老醜をさらけ出すこともないだろうから。

「観眼自在」、「これが難しい。目には観の目」と「見の目」の二つがあると、相手と対峙したとき、相手の眼を見るなどは、武道の心得で読んだことがある。視点をどこに据えるか、これは大きな問題だ。相手の眼を見ないでどこを見るか。

相手の剣先と手元の拳に視線を合わせよと言ふ。相手から見れば汪洋とした目付きになるらしい。相手の僅かな剣先の動きに応じて、技を仕かけるのである。

「観の目」とは何か。相手の気配を察するのは、五感である。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、つまり総合的な感覚で相手の呼吸や間合いや気合いを計る。それを「観の目」と言っているらしい。この二つの目を働かせて、自分を相手より有利な立場に立たせなさいと言っているのである。言つは易く、そつ簡単にできるものではない。

ところで「観の目」、「見の目」を持つこととは、医師としても大事なことでないか。病状を観察するのは、必ずしも「見の目」だけではない筈だ。「観の目」が必要。データを含めて、視覚だけに頼った診察では正確な病状の把握はできない。

「観の目」で患者さんの心の底まで見通す必要がある。そこに、ケース、バイケースの難しさがある。ままならないのは

剣の道だけではない。医の道もまたしかりである。

次の「懸待一致」、これも問題である。試合に臨んで先の気位に立つことは勝つための必須条件である。いずれも負けたくないから、互いに先の気合いで臨んでいる。互いに相手より先に打つていくことという気分である。そこで、「この一番」の業は「先先の先」である。つまり「機先を制すること。相手が打出つてする瞬間を狙って先に打つのが上手の技相手の出端を挫くことである。」

打つて出すつとずするその瞬間に、隙間が生じる。その隙間を辛抱強く待つのも勝つための手段である。逸る気分を抑えながら、そして先の気分をゆるめないうで待つ、それが「懸待一致」である。

逸る気分を剣先に悟られてはいけない。「波立たぬ」といっつのはそついつ事だと私は理解している。血気に逸る人ほど待つ事が苦手のようだ。

次に移ろう。山岡鉄舟の「剣禅話」に

こんな話が載っている。

楠正成が湊川で討ち死にする前夜  
広嚴寺に極俊禅師を訪れ、「生死の境とはどんなものか」と尋ねた。禅師は「両頭を斬断すれば、一剣六に倚りて寒し」と正成はそれを聞いて翻然として悟るところがあり、利のない戦いと知りながら勇躍戦場に赴いたという。この禅話の意味は私には到底理解しがたい。剣道は事理の二つを修行せねばならないと言ふ。事は技、理は心である。事理が一致したところこそ妙所があると。

そして「無刀とは何ぞや、心の外に刀

### 前号の訂正

37頁 石井光子氏の「こんにちには、ひつこと」専門を歯科に訂正します。

年賀広告中、66頁の飯田文良氏の

俳句は

アルプスの峰かがやきて初御空

初御堂は誤りでした。

表3（裏表紙の内側）医家写真展の

なきなり、「敵と相対する時、刀に依らずして心をもつて心をつ、これを無刀と謂ふ」と。事理を極めれば無刀の境地に達するということか。それとも生死を超越したとき、無刀流が達成されるということか。

恐らく私は一生こつこつ境地には近寄れないだろう。竹刀剣道では無理な話である。

「自戒五ヶ条」も、この辺りで「夢の五ヶ条」に切り替えて、専ら老醜をさらけ出さぬよう精いつぱい努めねばなるまい。

会場は「J.C. フォトサロン」東京都千代田区一番町25番地です。

同 最下段の発行所の住所で小平氏とあるのは小平市の誤り。

表紙 第54巻 春季号 通巻59

8号 の春季号は冬季号の誤り。

「迷惑をおかけしました。お詫びして訂正します。」